

◆特集 患者への図書サービス～地域の動き～◆

静岡県立こども病院図書室と地域連携

塚田 薫 代

I. はじめに

静岡県立こども病院は、1977年開院の病床数200、職員数約500名の小児専門病院です。

現在静岡県立こども病院図書室(以下当室)には以下の4つの機能があります。

1. 医学図書室

職員対象の医学専門図書室です。筆者は1992年より当室に勤務しています。

2. 患者図書サービス

2003年より開始した患児ご家族対象のサービスです。ご家族向けに分かりやすい医学書を揃え、当室を午前中開放して提供しています。

3. わくわくぶんこ

1995年より続く、入院患児対象の児童書や絵本を提供するサービスです。司書と7名のボランティアにより、11台のブックトラックを活用し、各病棟を巡回させています(図1、2)。およそ3,000冊の蔵書があります。

4. 地域との連携

筆者は1～3の業務のなかで、従来より、退院した患児のフォローの必要性を強く感じていました。当室として何ができるか考えた結果、わかりやすい医学情報を発信する事により、地域と連携し、患児への理解を深め、病気への偏見をなくすための活動を始めました。

以下「4. 地域との連携」について詳しく説明いたします。

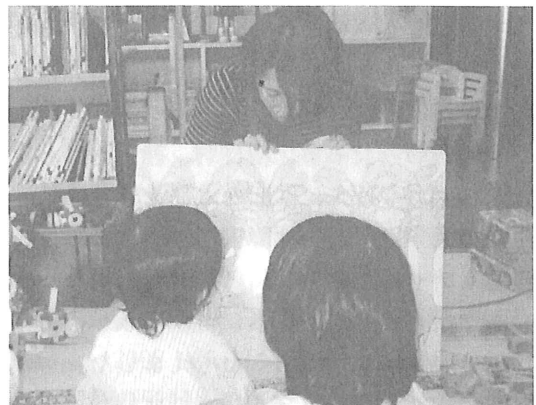


図1 よみきかせの様子

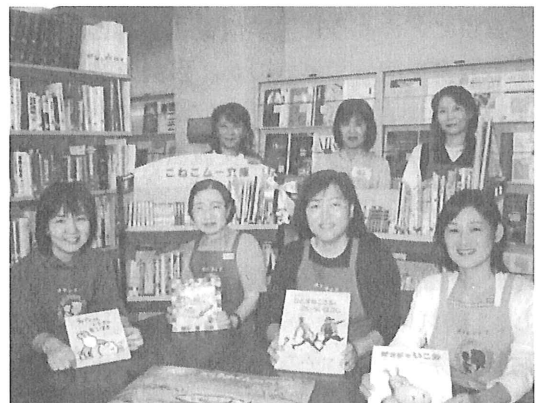


図2 わくわくぶんこボランティア

TSUKADA Shigeyo

静岡県立こども病院 図書室
stsukada@jun.ncvc.go.jp

II. 地域との連携の必要性

長期入院患児が退院後、地域の学校へ復学する際には、病気に対する理解不足や偏見のため困難が伴います。退院後もなお、院内学級に通って来る患児がいることを初めて知った時は、衝撃を覚えました。病気さえ治癒す

れば問題ないと思っていたからです。前田美穂医師は、『小児白血病の晩期障害』²⁾の中で様々な医学的晩期障害に加え「小児白血病には心理学的、社会的な問題があり、総合的に病気と対峙することが必要である」と述べています。つまり、これは晩期障害の一種であると、認識する事が出来ます。

また『病気の子どもの気持ち』³⁾にも「学校の先生と生徒に、私の病気について正しい知識を持ってもらいたかった」「がんに対する知識がもっと広まるとよい」という、患児自身の意見が載っています。

身体的のみならず、精神的、社会的にも良好な状態でなければ健康とは言えません。退院後の復学困難を晩期障害の一つととらえ、当室もチーム医療の一員として、分かりやすい医学情報を発信する事により地域への啓蒙活動を展開すべきであると考えました。

III. 具体的な活動事例

実際にどのように医学情報を発信し、地域との連携を図っているのか、事例を挙げて説明いたします。

1. 静岡県図書館づくり交流会* (2003年2月11日)

「わくわくぶんこ」について講演し、入院患児の生活や、分かりやすい病気の本を紹介し、「病気になったかわいそうな子じゃない、病気に勝った強い子なんだ」というメッセージを伝えました。それは、予想以上の共感、手ごたえを得ることができ、以後この活動を展開する上での大きな自信に繋がりました。

2. 学校図書館を考える会*

何と言っても退院する患児が戻っていく社会は学校です。学校における啓蒙活動は非常に大きな意義をもっています。そこで、学校図書館司書との連携を図るため、学校司書のネットワークに加入し、月1回の例会に参加

し、交流を図っています。また、メーリングリストや会報で、子どもにも分かり易い医学情報の本を紹介し、学校図書館を通じての啓蒙に努めています。学校図書館司書からは「こういった本をもっと紹介して欲しい」「〇〇の病気についての本を教えて」というリクエストもいただくようになりました。

逆に旬の児童図書に関する情報も学校図書館の現場からフィードバックしてもらう事が出来ます。

3. 静岡県立中央図書館職員研修会* (2004年6月29日)

「わくわくぶんこ」や患者図書サービス、主に患者ご家族への医学情報提供の重要性について講演しました。

公共図書館司書の医学情報に対する関心は非常に高く、今後の連携が大きな課題であると改めて認識しました。

4. 静岡市立三番町小学校図書ボランティア研修会 (2004年2月26日)

実際に小学校へ出向き、ボランティアのお母さん方対象に、「わくわくぶんこ」について講演しました。入院患児と同じ年頃の子を持つ親として、非常に共感をもって聴いていただくことが出来ました。ダイレクトに学校現場に情報を伝える絶好の機会として、今後もこのような活動を展開したいと考えています。

5. 退院する患児が戻る学校の教諭

1～4は、広く医学知識を啓蒙する活動でしたが、これはよりの絞った、ピンポイントの活動です。最近、復学する予定の学校の教諭が退院間近に保護者と共に来院し、患児の様子を見たり、主治医から説明を受けたりするケースが増えました。そこで、血液腫瘍科医師に依頼し、そのコースに当室も加えてもらう事にしました。参考となる図書のリストを作成し(図3)、実際の本を手にとって読んでもらい、説明をします。必要箇所は、コピー

して渡します。また、学校図書館や、近くの公共図書館で本を探してもらい、まず、教諭自身に読んでもらう事を薦めます。可能であれば、学校図書館に購入してもらうことも薦めます。これにより、少しでも退院する患児の環境がととのい、病気への理解が深まることを願っています。

一方受け入れる学校側も、不安が大きいのでこの情報提供はメリットがあります。しかし、プライバシーの保護という別の問題点もあります。保護者によっては「白血病やガンという言葉を使わずに、クラスメートに説明したい」というケースもあるのです。その理由は「白血病」や「ガン」のもつイメージがあまりに重く、不治の病を連想させるからなのでしょう。

一般社会における、誤った認識を払拭させるためにも、地道に啓蒙活動を続けていく必要性を感じます。

ブックリスト

退院おめでとございます！

- 1、『チャーリー・ブラウンなぜんんだい？
—子どもたちがおもい病気になる時—』
岩崎書店：1991：¥1200
- 2、『腫瘍の子どもを知る本 白血病の子どもたち』
大月書店：2000：¥1800
- 3、『クラスにひろきが帰ってきた』
キッズエナジー：2001：¥500 <http://www.kids-energy.org>
- 4、『仲間と。がんと向き合う子どもたち』
岩崎書店：2004：¥1300
- 5、『癌の病気について知ろう 小児白血病』
南山堂：2002：¥3200
- 6、『子どもが病気になる時 家族が抱く50の不安』
春秋社：2002：¥1700
- 7、『腫瘍の子ども情報ブック』
東京書籍：2001：¥1500
- 8、『小児ガンの子どものトータル・ケアと学校教育』
ナカニシヤ出版：2000：¥1800

お問い合わせは 静岡県立中央図書館図書室 054(247)6251 tsuhada@lib.nccn.ac.jp へどうぞ。

図3 ブックリスト

IV. おわりに

院外との連携は、時間的にも厳しい面もありますが、同時に確かな手ごたえもあります。

「クラスに小児ガンを経験した子がいて、どう対応していいか不安だったが、情報をもって良かった」というご意見が小学校の保護者から届き、連携の大切さを確信した事もあります。今後も病気や入院生活について情報を発信し、地域と連携を強めていきたいと考えています。

参考文献

- 1) 塚田薫代：わくわくぶんこ、静岡県立子ども病院の患者図書サービス.患者さんへの図書サービスハンドブック.東京：大活字；2001. P.190-191
- 2) 前田美穂：小児白血病の晩期障害.小児科診療 2002；65(2)：309-314
- 3) 病気の子どもの気持ち—小児がん経験者のアンケートから.助がんの子どもを守る会 2001.

* 静岡県図書館づくり交流会

公共図書館司書、学校図書館司書、家庭文庫、ボランティア、市民約70名が集う交流会。主催は図書館問題研究会・静岡市の図書館を良くする会。後援静岡市教育委員会。筆者は静岡市の図書館を良くする会会員。

* 学校図書館を考える会

静岡市内の学校図書館司書、教諭、ボランティア、市民で構成され、現在会員約140名。筆者も会員。

* 静岡県立中央図書館職員研修会

静岡県立中央図書館企画振興課主催。